



Reconstruction of lateral mandibular defect: a comparison of functional and aesthetic outcomes of bony reconstruction vs soft tissue reconstruction —long-term follow-up

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水上, 高秀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/2921

論文審査の結果の要旨

下顎骨において、悪性腫瘍や放射線による骨壊死の切除後は組織欠損を修復するために再建術が必要となる。主に遊離骨皮弁を用いた骨軟部組織の再建(骨性再建)、遊離軟部組織皮弁を用いた軟部組織のみの再建(軟部組織再建)のいずれかが選択される。下顎前方欠損では骨性再建が不可欠であるが、側方欠損では機能障害が比較的軽度であるため、骨性再建の必要性は意見が分かれる。本研究の目的は、下顎側方欠損に対する骨性再建と軟部組織再建を機能的・整容的に比較し、長期観察時での軟部組織再建の結果を評価することである。

下顎側方切除後に再建が行われた 25 例を骨性再建群 13 例、軟部組織再建群 12 例に分け、後ろ向きに、術後の摂食機能、会話機能、整容的結果について比較した。とくに機能については経時的に評価し、長期的結果を検討した。患者背景は両群間に有意差を認めず、平均観察期間は両群とも 50 か月以上だった。再建方法について、骨再建群では全例遊離腓骨皮弁を使用し、軟部組織再建群では遊離腹直筋皮弁を多く使用した。

摂食機能は術後 2 か月時には骨性再建群が軟部組織再建群よりも有意に優れていたが、最終診察時には軟部組織再建群も著明に改善し、良好な摂食機能が望めた。機能改善には、義歯作成などの歯科治療による健側の残存機能の維持・改善や、早期からの栄養教育が関与していた。会話機能は両群間に有意差を認めなかった。整容的結果については、骨性再建群が優れていた。

以上の結果から、軟部組織再建群でも長期的には良好な機能が望め、そのためには歯科治療や栄養教育などを含めた包括的なアプローチが重要と考えられた。

本研究により、下顎骨における骨性再建と比較しての軟部組織再建の長期的特徴が明らかとなった。とくに摂食機能の改善が望めることが示され、今後の治療選択において重要な臨床的情報を提供するものと高く評価した。

以上により、本論文は博士(医学)の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 戸倉 新樹

副査 佐藤 康二

副査 星野 裕信